

■ 修士論文要旨

国際財務報告基準の概念フレームワークに関する研究 —財務情報の質的特性と財務諸表の構成要素を中心として—

A study on the Conceptual Framework of IFRS

-Focus on qualitative characteristics of the financial information and elements of the financial statements-

神奈川大学大学院 経営学研究科
国際経営専攻 博士前期課程

白 崎 将 平

SHIRASAKI, Shouhei

■ キーワード

国際財務報告基準、質的特性、信頼性、検証可能性

近年の経済の国際化に伴い、経済の中心である企業の経営成績及び財政状態を測るものとして会計基準も国際化の流れの中にある。その流れの中心として、国際会計基準委員会（以下、IASB）の国際財務報告基準（IFRS）がある。2012年時点で金融庁が行った調査では、回答があった96か国のうちIFRSを適用している国の数は、83か国で、任意適用をしている国を含めると88か国であった。

日本においては、2010年の3月期からIFRSによる連結財務諸表の作成を容認しており、平成25年7月時点では、上場企業のうち、13社が任意適用し、7社が平成25年度の決算において導入予定であったが、平成26年12月現在では、東証に上場している企業のうち38社が任意適用しており、14社が今後IFRSを導入する予定である。このように日本の中で、IFRSは少しずつ広がりを見せている。

しかし、IFRSについて、日本国内において、様々な議論が行われている。これは、IFRSと

いう会計基準を、日本国内において、これまで以上に適用していくには、基準の違いという問題が存在しているためである。言い換えれば、IFRSの個別基準に関して、現行の日本の会計基準との違いが問題として取り上げられているのである。この問題の一つの要因として、基準を作成する際に用いられる枠組みである概念フレームワークに起因するものがあると考えられる。

そこで、本論文では、IFRS概念フレームワークに関する研究という主題として、企業会計基準委員会（以下、ASBJ）の討議資料である概念フレームワークとIFRSにおける概念フレームワークの比較研究を行うことで、概念フレームワークに内在する問題点を明らかにし、その改善案を模索する。

また、本論文では、IFRSの概念フレームワークの中でも質的特性と構成要素に焦点を当て、ASBJの概念フレームワークと比較し、その違いを明確にすることにより、IFRSの本格的な導入に進む際に問題が発生しないのかを検討する。

その際に米国の会計基準の概念フレームワークであるFASBの外部財務報告目的の会計情報基準も参考にしたい。

IFRSの概念フレームワークは、FASBとの概念フレームワークの改訂共同プロジェクトの経過において、旧概念フレームワークと新概念フレームワークとが存在する。そこで、本論文では、個々の概念フレームワークを明確に区別するために、それぞれIASBの旧概念フレームワークをIASB概念フレームワーク、IASBの新概念フレームワークをIFRS概念フレームワークとし、また、FASBの外部財務報告目的の会計情報基準とFASB概念フレームワーク、ASBJの討議資料の概念フレームワークをASBJ概念フレームワークと表記する。

本論文では、第1章において、IFRS概念フレームワーク、ASBJ概念フレームワーク及びIASB概念フレームワークとFASB概念フレームワークに関して、その目的とともにその発展に関して説明した。また、第1章においては、IFRSの目的は、IFRSに記載されている7つの目的に関して説明した。概念フレームワークの構造では、構成を説明し、概念フレームワークの基礎である一般目的財務報告の目的との関係やその構造を説明した。IFRS概念フレームワークの構造として、IFRSの概念フレームワークは階層構造ではなく、プロセス構造であることを述べている。その中でも、すべての基礎として、一般目的財務報告の目的がその他の概念フレームワークの基礎であることをまとめている。さらに、概念フレームワークの発展では、FASB概念フレームワークとIASB概念フレームワークに関して、従来の構成と新しい構成を並べ、概要を説明した。

第2章において、IFRS概念フレームワーク及びASBJ概念フレームワークにおける質的特性に関して、比較及び問題提起とともに解説した。質的特性の意義では、IFRS概念フレームワークの構成及びASBJ概念フレームワークの構成について説明した。質的特性においては、主な問題点としては、信頼性を忠実な表現という特性に置き換えたことと、検証可能性を必須である基本的な質的

特性から、補強的質的特性へと移動したことを挙げている。

第3章においては、IFRS概念フレームワーク及びASBJ概念フレームワークにおける財務諸表の構成要素に関して説明し、その内容に関して、2つの問題点を指摘した。財務諸表の構成要素の問題点として指摘したのは、財務諸表の構成要素の認識の条件における信頼性の意味合いの変更と資産及び負債の定義が財務諸表の構成要素の測定における現在価値と表現が似ている点を指摘しており、これは、検証可能性による客観性を欠くものであり、このような情報は意思決定に有用であるとは考えにくい。

したがって、結論では、IFRS概念フレームワークにおいて、質的特性に検証可能性を柱においた信頼性を採用することと、その検証可能性を柱においた信頼性を財務諸表の構成要素の認識の条件に置くことで、より検証可能性が高く、意思決定に有用な情報を創り出すことができるになると考えられる。このことにより、日本国内での採用も増えていくのではないかと考えた。